四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol 9

山と川のおもしろ話

高知県　大野見村長

市川（いちかわ）　幸雄（さぢお）

1　古老の昔話から

わしが若いときの事よ。ある日、山に罠を仕掛けちょったら大きな兎がかかっちょった。あまりにも大きいので、葛で獲物を縛って帰ろうと近くの葛を引っこ抜くと、それが山芋（自然薯）の蔓で、なんと山芋が3貫（約11kg）も付いてきたがよ・・・。シメシメとほくそ笑んで兎と山芋を肩に担いで得意満面で谷川の丸木橋を渡っていると、あまりにも獲物が重くてバランスを崩し、下の深ん淵へドブン・・・。こりゃしもうたと思って水から上がろうとしたが、なんだか重たくてなかなか水から出られない。やっとのこと河原にはい上がってみると、重たいはずよ。わしの褌のなかに谷エビが3升（5.4リットル）も入っていたがよ・・・。あればあ面白い事はなかったわや。

表現は少なからずオーバーであるが、中国の詩人、李白が詠んだ「秋浦歌」の白髪三千丈、縁愁似箇長、不知明鏡裏、何処得秋霜・・・を彷彿させてくれる話ではある。

2　川と山の考察

我が村は、日本最後の清流といわれる四万十川源流域に位置し、総面積100.41平方キロメートルの山村である。過疎化が進み、人口も1,600人足らずに減少してきた。

村民は代々、山と川に向かいあって暮らしてきたが、材価等の低迷が続き、山を取り巻く環境は厳しくなり、人工林化した山が荒れ始めている。その結果、当然の事ながら川の状態も年々悪化し、極端な水量の減少が顕著となってきた。

そのため、何時も良く釣れていたウナギの絶好の住み家が、水面から上に出てしまって無惨な状態となっている。かつては、前述の古老の話ほどではないにしても、淡水魚族の棲息は豊富で簡単に捕獲出来たのは事実であったが、現在では、谷エビ等は全く見ることが出来なくなり、危機的な状況となっている。

私は以前、四万十川上流淡水漁協組合長であった当時にこの事を予測し、川を守るために山の間伐を徹底するよう提唱したが、現実は余り進展していない。

今回、首長に就任し、行政面からもこれらについて力を注いで行きたいと思っているが、弱小の自治体では自ずから限界があり、国を挙げてこれらに取り組むことを強く望みたい。

四万十川上流（久万秋の沈下橋）